

かつて携わった建造物（番外編） 「つくば博」を覚えていますか

1985年、現在は茨城県筑波郡谷田部町（現つくば市）で“つくば博”あるいは“科学万博”と呼ばれた万博が開催されました。正式な名称は“国際科学技術博覧会”で、1975年の“沖縄国際海洋博覧会”に次いで日本で開催された“特別博”でした。



一般博であった“大阪万博”の成功により「博覧会ブーム」が訪れ、1980年代から1990年代にかけて日本各地で様々な「博覧会」が開催されているという状態が続きました。

ちなみに、日本で開催された“特別博”としては、ほかに1990年に大阪で開催された“国際花と緑の博覧会（花博）”があります。

テーマ館A館（出展：日本政府）



テーマは「人間・居住・環境と科学技術」。
高さ42メートルの透明なシンボルタワーと「我が国土」がテーマのA館と「我が暮らし」がテーマのB館の2棟からなるガラス張りの建物でした。

富士通館（出展：富士通（株））



テーマは「人間・ゆめ・技術」。
建物の壁面には滝が流れ、高さ15mに位置する幅5.3mのテンセグリティ構造体を応用したフレームが宙に浮いているような建物でした。

TDKふしぎパビリオン（出展：TDK（株））



テーマは「科学する心・創造する心」。このパビリオンでは、人間の感覚を超えた様々な動物の視覚・聴覚・触覚を実体験することができました。

東芝館（出展：東京芝浦電気（株））



テーマは「ヒューマン エレクトロニクス」。
建物は赤い鉄骨で覆われ、中央に大きくかかれた“TOSHIBA”の文字が印象的でした。
半円柱・直方体・三角柱が一行に並んでいるように見えました。



日立館（出展：日立製作所（株））



テーマは「Interface-技術との自由な対話」。
帽子のような形をした建物で、中心部は円柱型になっていて、2階の映像フロアーは回転式の4分割された円形劇場となっていました。

健康スポーツ館（出展：（株）デサント、スズケン（株）、大塚製薬（株））



テーマは「健康とスポーツを科学する」。42面の動くスクリーンを使った映像が評判を呼び、観客動員数は全パビリオンの中で最大でした。
3棟の建物を間に立つ柱から伸びたワイヤーが支える構造でした。

電力館（出展：電気事業連合会）



エレクトロ・ガリバー号に乗って、自然エネルギー・化石エネルギー・原子エネルギー・宇宙の4つのゾーンを見て回るという趣向でした。

HSSTパビリオン（出展：日本航空（株））



つくば博会場に設置する実験用のリニアモーターカーのレール（全長368m）を製作しました。時速30kmの低速走行ながら、世界で2番目の実用デモ走行に成功しました。

つくば博関連では、この他に2つのパビリオン、そして多くの関連道路の橋を手がけました。
また、牛久駅と荒川沖駅の間に期間限定で新設された「万博中央駅」の連絡通路や跨線人道橋、そして駅と連結するバスターミナルなどを手がけました。



万博終了後に「万博中央駅」は取り壊され、現在はその跡地に「ひたち野うしく駅」が開業しています。

【作成裏話】

社内報の裏ページの連載コラム「かつて携わった建造物」に『大阪万博 EXPO' 70』と題するものを掲載したのは、FABTECA 8号（2019年1月末発行）でした。

そのときから、今回掲載したコラムの構想は出来上がっていました。

私の中で大阪万博に次いで有名な博覧会は、愛知博でも沖縄博でもなく、つくば科学博だったのです。

社内報に掲載する機会がないかもしれないので、この場を借りて掲載する次第です。(S.T)